

第3回「ハンガリー旅の思い出」2006年コンテスト作品

立命館大学ユネスコ・ハンガリー調査実習チーム
山本さんの作品

ハンガリーの旅の思い出

今回の我々の旅の目的は、ハンガリーの街並み保存と、水資源を利用した持続可能な開発を調査するためであった。

2月20日 ドイツ系由でようやくハンガリーに到着。そこには我々がいまだかつて体感したことのないヨーロッパの世界が広がっていた。本当にハンガリーに来たのだ、と実感した。ハンガリーは歩く車博物館と謳われているだけあって、たくさんの種類の車が道路を走っていた。セントラル・ヨーロピアン・ユニバーシティの寮で早速ハンガリーの名産トカイワインとチーズを堪能した。私にとって人生初めてのワインは、筆舌しがたい豊かな香りと複雑な味わいを醸し出していた。

2月21日 この日の活動の拠点はブダペスト・ビジネス・スクールであった。午前中のプログラムのオリエンテーション、開会式、パーティーを経て、ハンガリーの学生と日本人の学生は徐々に打ち解けていった。午後はハンガリーの歴史および文化的背景、ハンガリーと日本の交流史、ハンガリー経済の現状について学んだ。ハンガリーに存在する企業の内、75%は外資系企業であるようだ。確かに、ブダペスト市内を歩いていて、随所で日本企業の看板を見かけた。ハンガリーの学生たちは、陽気で、我々にとても親切にしてくれた。彼らは、大学で我々が活動するのに困らないように、日本語でトイレや食堂の場所を示した道案内の紙を、大学の至る所に提示してくれていたのだ。また、ビュッフェでは、学生がトゥーロールディというハンガリーの国民的駄菓子を買ってくれた。トゥーロールディは、チョコレートの中にカッテージチーズが入っており、甘酸っぱくておいしかった。夜は現地の学生たちが歓迎会を開いてくれた。ウニクムというハンガリーのお酒を飲んだ。独特の味は我々の口には合わなかったが、とても健康に良さそうである。パーリンカという蒸留酒にちなんだ歌を教えてもらい、皆で大合唱した。彼らの心遣い、厚遇に我々は感動し、しだいに友情が芽生えた。

2月22日 ハンガリー世界遺産委員会にてハンガリーに存在する8個の世界遺産に関する講義を受けた後、建築の調査をした。マーチャーシュ教会は、13世紀にオスマントルコに攻められ、一旦はモスクに改修されたのだが、教会に再改修されて現在に至るようだ。ビザンチン風の壮麗なこの建物には、2つの異なる文化が共生しており、不思議と暖かい雰囲気を感じさせた。その後、漁夫の砦からブダペスト市を一望。大河ドナウ川の豊かさにしばし時を忘れた。夕方、スイーツパーラーでクレープを食べた。ハンガリー人の友達、ユディットちゃんが注文したのは、レイヤーズ・オブ・エブリシングであった。文字通りレイヤーズ・オブ・エブリシングには、チェリー、ナッツ、チョコレート、クリームが並々ならぬくらいたっぷり含まれていた。この実にボリューム満点なクレープケーキを皆で協力してたいた。



フルーツパーラーで食べたレイヤーズオブエブリシング

2月23日 終日、ペスト側の世界遺産の見学をした。アンドラーシュ通りを歩きながら、長い歴史をもつ建物の彫刻やその壁画をみることができた。外壁からもその時代の特徴がわかるのだ。オペラ座の歴史や、世界最古の地下鉄を初めとして、全てが日本にないものばかりである。地下鉄の愛称が「地下鉄ちゃん」であることにもハンガリーの人達の親しみやすさを表しているのかもしれない。昼ごはんは世界で一番豪華なマクドナルドで頂いた。シャンデリアの下で食べるハンバーガーもまたハンガリーならではの、おもしろい体験である。



市内にある、かつてゲシュタポの秘密組織だった建物

午後に見学した国会議事堂は、バロック・ゴシック・オリエンタルといった、様々な建築様式が見事に調和していた。斜め十字架の王冠の謎にせまり、市場でハンガリーの物産品に触れる。街を散策して気づいたこと、それは現在のハンガリーにも、旧ソ連占領下の名残があることだ。元軍事施設の建物の存在や、高齢者はロシアの帽子を多くかぶっていることに気づき、島国日本では滅多に見ることのできない、他国との密接な関係を見ることができた。ハンガリーにある多くの建物が、ミレニアムの数字に関連して作られていることにも驚いた。次の世紀によせる期待は今でも変わらない想いなのかもしれない、と感じた。この季節は、でこぼこの雪解け道をたくさん歩くのでスニーカーが一番である。



中央市場



パンノンハルマ修道院の内部の様子

2月24日 ユネスコ世界遺産であるエステルハージ宮殿を訪れた。ここに、かの有名なハイデンが宮廷音楽家として務めていたらしい。庭もさることながら、内部はとても広大であった。当時入手することが困難であると思われる、中華風や和風の食器及び家具が数多く飾られていた。昔の宮廷の暖房の仕組みや、宮廷に仕えていた従業員の作法を学んだ。その敷地の広さ、部屋の数、希少価値の高い家具から、エステルハージ家が相当裕福であったろうことは想像するに難くない。次に、フェルトウー湖の周辺へ行った。人間の手が加えられていない、まさにありのままの大自然がたたずんでいた。あいにく直接湖を見ることはできなかったのだが、バードウォッチングができた。午後からは、パンノンハルマのベネディクト修道院を訪れた。高校のときに世界史で習って以来憧れていた世界遺産は、厳粛な雰囲気であった。修道院からパンノンハルマを見下ろすと、そこには絶景ともいべきすばらしいパノラマが広がっていた。その日ディナーを食べたレストランでは、音楽家達が私たちに「さくらさくら」を演奏してくれた。ハンガリーに来て、まさかこの曲を聴くことになるとは想像もつかなかったのだが、彼らのおもてなしの心に感激した。

2月25日 観光地センテンドレを訪れた。セルビア正教会、ローマ・カトリック教会などの教会や博物館、カフェがあった。石畳の路地が中世の面影を残していた。ここでハンガリー家庭料理風の素朴なお昼ごはんを頂いた。ハンガリーのパスタは細くて短い、おいしかった。夜はエヴァちゃんのアパートで現地の学生との交流パーティーが開催された。ハンガリー人はダンスがとても上手で、日本人は手取り足取りダンスを教えてもらっていた。ハンガリー人は、個を尊重するから個人のダンスに長けているのだ。それに対し、日本人は集団の和を重んじる傾向にあるため、ダンスでの自己表現はあまり上手ではないようだ。文化の違いをここでも学んだ。



センテンドレの街並み

この日私は、ドリちゃんのお宅にホームステイした。お土産に、雛あられと緑茶を持っていったのだが、すごく喜んでくれた。ドリちゃんは日本の文化にとっても興味があるようで、彼女の部屋には日本の製品がたくさんあった。年1回行われるバザーで、日本語教師から、日本の雑誌や絵本、食材を購入するらしい。ひじきを料理してくれと言われたのだが、味付けに必要な調味料が無かったため、作ってあげることが出来なかったのが残念だった。

2月26日 朝ごはん、ホスト先のマアムがハンガリー風サンドイッチを作ってくれた。パンにたっぷりのクリームチーズとパプリカとトマトをのせて頂いた。パプリカの甘さとチーズの絶妙なコンビネーションはとてもおいしかった。私は日本語と英語、マアムはマジャール語のみしか話せないのだが、お互い言葉が通じなくても心は通いあっていた。ホームステイで、語学を超えたコミュニケーション能力を培うことができた。

2月27日 午前中は、ブダペスト商科大学で講義を受けた。環境に関する問題や条例についての話だった。講義の後初めて大学の食堂で昼食を食べた。寮や他のレストランでは、食べきれない程たくさん料理が提供されるのだが、思っていたほど無茶な量ではなく美味しく頂けた。午後からはハンガリー政府観光局に行き、ハンガリーの観光について、プレゼンテーションを聴講した。案内されている間に、建物の形式がバロック様式の建築であることを教わった。歴史的な建物でも一般の人に広く認識されていることを知り驚いた。プレゼンテーションは3部構成でハンガリー政府の開発計画から始まり、上下水の普及や車両による大気汚染対策などの目標、そして世界遺産や歴史的価値のあるものに対するの修繕・補強といった話だった。町の景観を守るための条例はほとんど存在しないこと、市民の景観保護の意識の高さから景観が守られていることを知り日本との差を痛感した。プレゼンテーション終了後、ハンガリーの建物の修繕についての歴史の資料を見せてもらった。地震が無い地域ではあるが建物の寿命の長さに驚いた。夕方は、カフェ・ジェルボーで、至福のひとつときを過ごした。豪華な内装の中で食べたカプチーノとケーキは最高に贅沢であった。夜は皆でスパルタクスのバレエを観賞した。言葉は理解できなかったものの、スパルタクスの人生に共感した。涙が出るほどに感動した者も多かった。踊りもさることながら、音楽の本場ハンガリーのオーケストラの生演奏は実に素晴らしいものであった。ショーの合間に味わったシャンパンもまた、格別であった。

2月28日 午前中は大学でNGOの環境保護活動の講義を受けた。午後はブダペスト市議会環境委員会で市の環境保護活動と世界遺産保護活動を学んだ。また大学に戻り、討論を行った。移動の途中でハンガリーの学生に日本の早口言葉を教えてあげた。ハンガリー人は言語の習熟が日本人より格段に早いからか、すぐにマスターしたのは驚いた。内陸国ハンガリーでは魚がそう簡単には手に入らないため、肉中心の料理が多かったのだが、この日のディナーではドジョウを食べた。ドジョウというと、生臭さや泥臭さのイメージが先行していたのだが、素朴な味わいだった。ドジョウを食べた経験の無い方は、是非挑戦してみると良いだろう。

3月1日 午前中はハンガリー科学アカデミー世界経済研究所で経済発展における草の根の活動について学んだ。移動の途中、カフェで休憩。ハンガリーには気軽に入れるお洒落なカフェが多い。参加者の中には、ブダ地区とペスト地区を結ぶ鎖橋を渡った者もいた。午後はハンガリーユネスコ委員会を表敬訪問した。夜、再びゲッレールトの丘を登った。丘から見下ろすブダペスト市の夜景は実にロマンティックで、言葉を失うほどであった。今まで自分が訪れた中で一番美しい景色といっても過言ではない。ライトアップされた鎖橋は幻想的で美しかった。



夜のライトアップされた鎖橋

3月2日 終日、翌日に行うプレゼンテーションの準備をした。必要な情報を収集するにあたって、マジャー語でしか表記されていない文献は、ハンガリーの学生が翻訳してくれた。

3月3日 午前中、大学で、日本人参加者は研究の成果のプレゼンテーションを行い、大学の教官と議論した。午後は閉会式と歓送パーティーが開かれた。最後に、参加者全員でLet It Be を歌った。お土産に、ハンガリーの伝説の動物の絵が刻んであるペンダントを頂いた。夜もハンガリーの学生たちがパーティーを開いてくれた。

3月4日 名残を惜しみながら、無数のお土産と思い出と研究成果を引き連れて、我々はハンガリーを出発した。

ハンガリーにいた二週間、私達はまさにグローバル化の中心にいたといえる。参加者全員が、この旅は非常に貴重な経験であったと感じていた。なぜなら、現地学生と共に学び、遊ぶという、一般の観光コースでは体験できない経験をしたからだ。皆、視野が広がり、国際人としての素養・感覚を身につけることができたと思う。さらに、日本文化のアイデンティティを再発見・再認識する契機にもなった。おいしい料理を食べ、特産品のワインを飲み、ハンガリーの経済発展、観光政策、世界遺産・環境保護について学んだ日々は、他の何物にも変えがたい。今回の旅で芽生えた国境を越えたハンガリーと日本の友情は永遠の宝物である。そして我々はこれからもハンガリーと日本の架け橋であり続けるだろう。最後に、我々にこんな素晴らしい機会を与えてくださったハンガリーユネスコ委員会及び関係諸機関に改めて感謝の意を表したい。クスヌムシーペン！